談話会

海外学術調査の
スリルと愉しみ

早　坂　七　緒

日時　2018年２月２日（金）

場所　駿河台記念館 310号室

主催　中央大学人文科学研究所

「人文研ブックレット」の発刊にあたり

人文科学研究所が主催した公開講演会、研究会、談話会、シンポジウムのうち、専攻を異にする研究員にとっても興味深く、研究者間の交流に役立つと思われる、例えば学際的領域を扱ったテーマのものを「人文研ブックレット」として発行することにしました。研究チームから提案のあった企画を含め、運営委員会が立案、実施した後、同委員会が審議のうえ決定したものをブックレットの対象としました。

研究所では、共同研究の成果を「紀要」、「叢書」として刊行していますが、人文科学の名で呼ばれる研究分野はあまりにも多岐であり、時に、研究チーム間の関係は疎遠になりがちです。日常の研究領域の枠を越える方へ我々を刺激してくれるこれら口頭による発表や報告も、研究所の重要な研究活動の一つと考えます。催しに出席できなかった研究員に、後日その内容を届けるのが目的ですが、同時に、口頭の発表であるために、おのずと専門語は敷衍され、読者は解説されたメッセージに直接ふれることになりますから、一研究所の中だけではなく、多くの方々にも親しく読んでいただけるものと信じています。

一九九三年五月二二日

中央大学人文科学研究所

海外学術調査のスリルと愉しみ

こんにちは。ご紹介いただきました早坂です。理工学部でただ一人のドイツ語専任教員をやっています。

この「海外学術調査のスリルと愉しみ」というタイトルにしましたのは、考えてみると、本当にここ二〇年ほど海外学術調査をしては、何かを書いているというパターンが続いていますので、半分は、せっかく辺鄙な日本に生まれたので、海外学術調査なんかはいかがでしょうというお勧めも兼ねて、しゃべらせていただきたいと思います。

まず私の研究テーマである作家ローベルト・ムージルは、多少有名なのですが、あまり読んだことがないというのがむしろ普通で、ドイツ人でもそうです。どれだけ重要な作家かというと、これは一九九九年にミレニアム、千年紀を記念してミュンヒェンの文学館とベルテルスマン出版社が共同でアンケートをしまして、「二十世紀ベストのドイツ語小説は何でしょうか」というの

を、三三人の作家と、三三人の大学教授と、三三人の文芸評論家にアンケートした結果、見事一位に輝いたのが、ムージルの『特性のない男』だったのです。一九三〇年に第一巻が出て、一九三二年に一応第二巻が出たのですが、未完で、その後続きを書いているうちに、亡命地のスイスのジュネーヴで一九四二年に死んでしまったという、不運な作家です。[1]

これがムージル五一歳の時の写真です。これは、ベルリン時代です。第一次大戦後のインフレで財産を失い、いろいろなユダヤ人の篤志家から寄付をもらって、その寄付で作った背広を着て、写真に撮られたところです。身長は一六四、五センチメートルで、小柄なのですが、がっしりしていて、恐ろしく強そうで、また実際に強かったようです。

学歴としてはまず陸軍実科学校を出まして、その後、今度はチェコのブリュンのドイツ工科大学に進んで、エンジニアの資格を取り、その後いったんはエンジニアになりましたが、ベルリン大学の文学部に入って、哲学の勉強をして、哲学博士にもなったという、少なくとも三種類の職業に就けた人です。

（プロジェクターで呈示しながら）これが主著の『特性のない男』で、中身はだいたい一六〇〇頁ぐらいで、大変です。私は二年半かけて、修士課程を一年延ばして、なんとか読み終えたというようなものです。

この、向かって左の写真が三〇歳ぐらいです。右側が三八歳ぐらいのムージルです。左側が、作家を志して短編集『合一』を書いていた頃です。右側は、第一次世界大戦に参加しまして、結構ドンパチして、イゾンツォ、ソチャですね。今のスロヴェニアあたりの戦線にもいました。ちょうどヘミングウェイの『誰がために鐘は鳴る』の舞台になった、二箇月でイタリア軍とオーストリア軍の双方に一〇〇万人ほどの死傷者が出たというきつい所でも、兵士というか将校ですから副官を務めました。その後病気になって、今度は北イタリアのボーツェン、ボルツァーノの司令部に勤めて、作家でもあるから『兵隊新聞』の編集長を一年近くやったといういろいろな功績で、勲章を三つもらっています。ですが、本人はこんなものは要らないという顔をしています。本を書く暇がなくなってしまいました。結局ライフワークの『特性のない男』も未完に終ってしまった。ナチス時代はムージルの本は禁書になりましたし、一九三二年の長編第二巻以降は話題になるような作品を発表していない

ムージル51歳.
© Ullstein Bilderdienst, Berlin

ので、ほぼ忘れ去られたままジュネーヴで客死するわけです。

なぜムージルに関して海外学術調査が可能か、あるいは必要かというのは、この辺に理由があります。そのままであればムージルはもう、忘却の淵に沈んで消え去った作家でした。

でも一九四八年にカイザー＝ウィルキンス夫妻がロンドンタイムスに「ローベルト・ムージルは、今は忘れられているが、最も重要な二〇世紀前半の作家である」と書いて注意喚起しました。それから一九五二年にフリゼー編集による『特性のない男』が刊行されまして――これは遺稿部分を恣意的に編集したというので、のちに批判されるのですが――やっと大方の読者、研究者の関心が盛り上がってくるわけです。ところが文学研究者が調べようとしても、もう本人はもちろん、奥さんのマルタ・ムージルも一九四九年八月にローマで亡くなっていまして、マルタの息子のガエターノとか、娘のアンニーナとか、アンニーナはカリフォルニアに行きますが、部分的なことしか覚えていないというので、ムージルの生涯については、もう穴だらけというか、知らないことがたくさんありました。

いわば考古学の発掘現場で大きな壁画が見つかったけれども、あちこちモザイクのピースが剝落していて、まだまだ全貌は分からない、という感じでしょう。ムージルの壁画のピースを探し出して、全体のどこかを補塡してゆく、というのが一九六〇年代から今に続く流れでした。それ

にリアルタイムで伴走できたのが、私の幸せだったというか、大袈裟に言えばラッキーな運命であったとも言えると思います。

以上がムージルの簡単な説明ですが、去年の九月に一つ海外学術調査で手に入れたものがありますので、それをお見せしたいと思います。

シュトゥットガルト工科大学のドキュメント

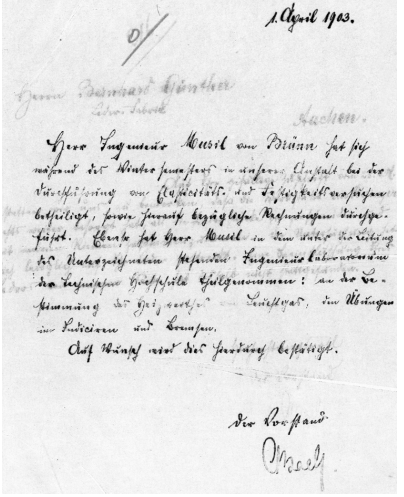
これが、シュトゥットガルト工科大学です。ムージルは、シュトゥットガルト工科大学に、一九〇二年から一九〇三年にかけて、無給助手として、かれこれ半年近くいました。ムージルの父親がやはりエンジニアで、ブリュンのドイツ工科大学の学長を二回務めた親父さんです。息子がエンジニアになったというので、シュトゥットガルトにある材料試験所、あるいは機械工学実験室に修行に出しました。この写真なんかはそうですが、一九〇一年にできたばかりの、ピカピカの最新実験設備です。所長のカール・バッハという人が、父親のいわば同業者で知り合いなので、息子の監督と教育をよろしく、と頼んだとみられます。

ここにムージルがいたということになってはいるのですが、直接的な証拠は今までありません

でした。父親がいとこに書いた手紙などから一応推測して、一九〇二年の一〇月から一九〇三年の八月までシュトゥットガルトにいたということになっているのですが、これまで何の裏付けもなかったのです。ところが昨年九月に私がシュトゥットガルトに行きましたら、ドキュメントが出てきました。

これは所長のカール・バッハが書いた証明書です。手書きですけれども、日本語に訳しますと、「一九〇三年四月一日（日付）、ブリュン出身の技師ムージル氏が、冬学期中、われわれの施設で弾性および強度の実験に参加し、それに伴う計算を遂行した。同様にムージル氏は、署名者の指揮下にある工科大学の機械工学実験室で、都市ガスの発熱量測定、計器表示および制御に関与した。本人の要請によりここに確証する。所長カール・バッハ」とあります。これが今まで見つからなかったのですが、施設が大きく二つに分かれていて、ひとつは機械工学実験室（Ingenieurlaboratorium）、もうひとつは材料試験所（Materialprüfungsanstalt）で、カール・バッハはその両方の所長だったのです。この後者の材料試験所のほうの記録がいままで、シュトゥットガルト工科大学のアーカイブ、つまり文書館に移管されていなかったので、今見つかったというわけです。

この文書については、三月に発行される中央大学「ドイツ文化」に発表します。これの抜き刷



1. April 1903.

Herr Ingenieur Musil von Brünn hat sich während der Winterfeiertage in unserer Anstalt bei der Untersuchung von Flugzeugen und Flugzeugmaterialien betheiligt, sowie persönlich bezügliche Rechnungen eingereicht. Ferner hat Herr Musil in dem Sinne der Leitung des Naturgeschichtlichen Museums Ingenieur-Laboratorium der Technischen Hochschule Stuttgart unentgeltlich: an der Bestimmung der Gewichte, Leistungen, die Messungen im Luftraum und Bremsen.

Auf Wunsch wird dies gerne bestätigt.

Der Vorstand.

カール・バッハの証明書。Universitätsarchiv Stuttgart (UASt) 33/2/427 (Materialprüfungsanstalt Stuttgart. Kopierbuch Nr. 13) B1. 290

りが出たら、私はすぐにアメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、オーストリア、スイス在住のムージル研究家に航空便で送ります。それでクレームが出なければ、クラーゲンフルトにあるムージル文学館で、デジタル版の全集に収録されます。まあ小さな世界ながら歴史的発見という運びになります。というわけで、はい、みなさまは今、世界に先駆けて新発見のムージル関係のドキュメントをご覧になっているわけです。

これはテュービンゲン在住のカール・コリーノ博士ですが、コリーノを先に見たほうがいいですね。この眼鏡

カール・コリーノと筆者。2014年８月、テュービンゲンにて。

のドイツ人ですが、カール・コリーノといって、ムージルの伝記的な研究では大御所、トップです。すでにお話ししたように、一九六〇年代にムージルが再評価されたのですが、彼の生涯については、もう穴だらけというか、知らないことがたくさんありました。これを、コリーノは必死に調べまくって、ジグソーパズルのピースを埋めて、なんとかムージルの伝記を作ってきたという人です。このカール・コリーノが二〇〇三年に、二〇〇〇ページの『ローベルト・ムージル』という伝記をローヴォルトから発行しました。二〇〇三年当時の、最新のムージルの伝記です。この中に、それ以前に私が見つけたものも、幾つか、半ダースぐらいは入っています。

このコリーノの伝記を、これは法政大学出版局

ですが、日本で一三年かけて、一〇人ぐらいの仲間と翻訳出版しました。三巻本になってしまいました。コリーノと緊密に連絡をとって作業を進めましたが、コリーノは「伝記は日本語版のほうがドイツ語版よりよくなる」と言っていました。

フランスのムージル研究家がコリーノの『ローベルト・ムージル』を読んですぐに、これは、翻訳は不可能と判断して、フランス人は翻訳をやめてしまいました。アメリカやイギリスから英語訳はまだ出ていません。イタリア語の訳も出ていません。結局、わざわざ訳したのは日本人だけだったという状態です。これは、索引などのいろいろなものを、独文科の大学院生に手伝ってもらって、チェックしてもらいました。それから、固有名詞のスペルチェックや、生没年とか、引用箇所とかを、みんなチェックしてもらったわけですが、学生アルバイトの謝金も、結局研究費からということで、中央大学のバックアップで行いました。翻訳ですから、校正、再校、三校、念校を、郵便で三分冊分やりとりするわけですが、その通信費も中央大学のお金です。結果的に日本のムージル研究の何割かは中央大学のサポートを受けていることになります。

それで翻訳してみると、ラテン語がたくさん出てきます。「コリーノさん、ラテン語がたくさん出てきますね」と言うと、「私はギムナージウムで、ラテン語は九年、ギリシャ語は六年習いました」と言うのです。私は大学一年生の時に第三外国語のギリシャ語の時間に行ったら、一教

室だけで、そこに学生が二〇〇人集まっていて、立ち見でした。立ち見で、ギリシャ語の先生が「来週から岩波全書の一章から五章までの練習問題の答え合わせだけをやる」と言うのです。火曜日の五時間目なので、火曜日は英語があって、ドイツ語があって、それからギリシャ語の予習までやっている人も中にはいましたが、朝五時までかかると言っていました。結局、学生に諦めさせているのです。そんなのが、東京の大学なのですからね。ギリシャ語を習いたいという学生が二〇〇人来たら四〇人クラスを五つ作って、ギリシャ語の先生を東京なのだからあと四人呼べばいいのです。ネイティヴによるドイツ語会話の授業が大講堂に学生三〇〇人詰めこんでやっているとか、本当にもう、某国立大学は何をやっているのでしょうね。ふつうに教えればほぼ百パーセント吸収する学生たちが習いたいと来ているのに、いわばドブに捨てているわけです。ほとんど教育上の犯罪ではないでしょうか。それはイコール日本の知的資源の圧殺でもあると思います。……とまあ今は愚痴を並べるほかありません。私のように田舎の中学、高校に通ったものには、ギムナージウムのようにラテン語、ギリシャ語はもちろん、ドイツ語の授業を受ける機会もありませんでしたから、コリーノのムージル伝記には、マシンガンに竹やり一本で向かうような感じで、読解を進めました。

このコリーノが、去年の六月に私が「シュトゥットガルトにムージルのことを調べに行く」と

言ったら、もう調べ尽くされていると、「私の見るところでは、シュトゥットガルトで新たに調査しても何も見つかりません。でもまあ、幸運を祈る！」というメールをもらいました。

なにしろすでに、一九八九年に調べ尽くした人のパンフレットが、シュトゥットガルトで出ています。これ以上のものは見つからないという状態だったのですが、これが出てきました。ローカルな話ですみませんが、こちらは「ブラボー！」といったところです。ブラボーと言ったのは、このシュトゥットガルト工科大学のアーカイブのノルベルト・ベッカーさんが見つけてくれたので、まず彼のメールへの返信に「Bravo!」と書きました。つまりベッカー博士は、私が行く一週間ほど前から資料をワンセット揃えてくれていました。というか、経験者はご存じでしょうが、だいたい海外学術調査に行くと、アーカイブではこういうふうにセットして置いてくれています。

これがもしドイツ人が、普通にこういう施設に行くと、まず登録して、それからカルテを引っかき回して当たりを付けて注文すると、その日の午後や翌日に閲覧室に現物が出てきて、見ると外れだったりして、またもう一度注文して、下手をすると三日や四日ぐらいかかって、自分であれこれ探しても外れだったということも全然珍しくありません。ですが、この海外学術調査になると、九月に現地のアーカイブを訪問するなら五月か六月ごろにメールで申し込んで行くと、なんと、部屋にもう関係ありそうな本や各種資料が整然と置いてあって、しかも当該箇所にしおり

が挟んであります。この場合ベッカーさんは使えそうなものはコピーまで取っておいてくれています。やや大袈裟ですが、水戸黄門が調べに行ったような感じにしてくれます。

私が到着する前にまずこうやっておいて、しかしベッカーさんは、新しいものが何もないというのは分かっていたので、新たに別の施設から届いた、百年前の先ほどの手書きの記録を調べてくれました。このカール・バッハの文書がなぜあるかというと、昔はコピー機がないので、手紙や証明書を書くと、写しを必ず取っておきます。ですから、せっかくProf. Hayasakaが日本から来るのに手ぶらで帰すわけにはいかないだろうということで、二冊で二〇〇ページ以上ある古文書をひっくり返してくれました。私は九月七日にシュトゥットガルトを訪ねる予定だったのですが、九月五日、つまり二日前にベッカー博士から、このドキュメントが見つかったとメールが来ました。

つまり、私がわざわざルフトハンザで一〇時間かけて日本から来るということで、ベッカー博士が頑張って見つけてくれたわけです。これまでカール・ディンクラーゲや、ヴィルヘルム・バウジンガーとか、きら星のごときムージル研究家がシュトゥットガルトに行って捜しても見つからなかったものです。皆さんもせっかく日本という辺鄙な所に生まれたのですから、こういう海外学術調査を活用しない手はないでしょう。この特権を活用することをお勧めしたいです。

チューリヒのムージルの住居

アーカイブを訪ねると、先ほどのように資料が重なっているときは、じつはほとんどの場合、大した獲物はないのです。本当のヒットのときは資料の山はなくて、さっぱりしています。一昨年チューリヒに行ったときの写真です。

この真ん中のエスター・フクスさんは、チューリヒの建築史文書館の職員ですが、この人は肝心なものを見つけたのに、けろっとしています。ムージルは一九三八年にナチスに併合されたオーストリアから、スイスに旅行と称して亡命したわけですが、チューリヒで、ペンション・フォルトゥーナという所に半年住んでいました。このペンション・フォルトゥーナのどこに住んでいたのかが分かりませんでした。建物は戦後すぐに取り壊されて残っていません。建物正面の写真は残っているけれども、奥の方はどうなっていたのか、ムージル夫妻はどの部分に住んでいたのかが、ずっと分かりませんでした。

妻のマルタ・ムージルは、娘のアンニーナに、「上のほうに住んでいて、部屋が四つあって、お風呂もきれいですてきだ」とかと書いているのですが、それに該当する部屋がどうも見つから

ペンション・フォルトゥーナの裏の離れ。SLA Nr. 4858 – 28/8. Juni 1945. Baugeschichtliches Archiv Stadt Zürich

ないといって、それについて、新チューリッヒ新聞に、もう三回ぐらいコリーノが記事を書いたりしています。ムージルの住んでいた部屋が分からないのです。ペンション・フォルトゥーナの住所はチューリヒの水車小川通り（Mühlebachstrasse）五五番と分かっているのですが。

ところが音に敏感なムージルが、子どもたちがうるさくて困るという手紙を大家さんに書いていて、それが残っています。子どもたちが学校帰りにギャーギャー騒いだり、走ったり、木によじ登ったりしてうるさいというのです。このことをすでに打診のメールで、先ほどのフクスさんに伝えておいたら、九月に訪問したときに「これでしょう」と言うわ

けです。つまり「水車小川通り」だけで捜していたからこれまで分からなかった。その一本東側にある、海豚通り（Delphinstrasse）、ここを学校帰りに子どもたちがギャーギャー騒ぎながら帰っていたと。この写真の三階建ての建物が、部屋の構成がぴったりなのです。ですから訪れた建築史文書館でフクスさんが「はい、これ」と出したときには、「ブラボー」と拳を上げました。机の上にはこの写真のほかに、百年まえ、二百年まえの市街地図など、数枚の資料しかありませんでした。本当のヒットのときは、そんな風にサッパリとしているものです。

ドキュメントの画像について

ところでこの写真にはサンプルと書きこんであります。なぜかというと、オリジナルから取った画素数の多い写真は紀要とその抜き刷りに一回使ったらお終いで、あと、私はもう使えないのです。使えないというか、使ってはいけないということになっています。著書を出された方はお分かりと思いますが、本にはできるだけいい写真を使いたいので、六〇〇ｄｐｉから、できれば千二百ｄｐｉ（ドットパーインチ）、そういう密度の高い写真を出してくれと出版社から言われるわけです。それをまたぶつぶつの点にするので、結局画質は落ちるのですけれども。それでも

元の画像は極力高画質のものを使います。

これはやはり去年の論文「チューリヒのムージル」（Musil in Zürich）に貼り付けた、ムージルと妻のマルタの写真です。一九三九年にペンション・フォルトゥーナの庭で撮影されたものです。これの版権をキーストン（KEYSTONE）が持っています。これが、その写真を使用するに当たっての契約書です。見にくいかもしれませんが、例えば「発行部数千部までの紀要」に載せる、という条件が書いてあります。また四分の一大と、ページの四分の一まで載せていいということです。また図版について「キーストン」と出典を載せなかった場合は料金五割増しとか、そういうペナルティーが書いてあります。そういう条件でこの写真を使用するということで、一枚につき一万円ぐらいの料金が取られます。ほかのアーカイブも同様で、チューリヒ市文書館も、建築史文書館も、まあ部数が少ないから七千円とかオマケしてくれたりするけれども、きちんと条件を明示して料金を取ります。もちろん紀要論文一回限りの使用ということです。ですからたとえば私はホームページを持っているのですが、ホームページには圧縮した画像を載せないと、ペナルティーが課せられます。キーストンなんかは写真の版権で生きているような会社ですから、かりに他の人がホームページから自由に画像をコピーできるようになったら、キーストンの商売が成り立たなくなります。

それなのに、おととしでしたか出版委員会から、「紀要論文はそのまま学術リポジトリに載せられる形で出してください」という要請があったので、それは少し分かっていないのではないだろうかと思いました。紀要に載せる写真・図版と、リポジトリに載せられる写真・図版は当然違う場合があるので、耳をそろえて出すわけにはいかないとお願いしました。先日、今年度の出版委員会の規定を受取りましたが、大変改善されていました。図版についてもＯＫでした。それだけでなく抜刷りの部数についても、本人の要望に応じて――一部自己負担ではありますが――配慮されていました。私の場合、重要な論文はまず欧米のムージル研究家三〇人ぐらいに送付したい。日本の仕事仲間や研究家にも三〇部ぐらい送りたい。そして自分の予備のストックとして一〇部ぐらい、合計で七〇部ぐらい欲しいときがあるのです。去年までは抜刷りは五〇部と固定されていました。(2)

海外学術調査の段取り

さて実際には海外学術調査をどうやるかです。まず実際の現地調査の三箇月か四箇月まえに当たりを付けて行きます。さきほどの場合は、シュトゥットガルトに行く前に州立博物館とか、何

とかアルヒーフとか、ネットで調べると関連施設が三つか四つありますから、そこにまず、「紳士淑女の皆さま」というような格好で、こういうことを調べに行きたいですとメールを出すわけです。まず自己紹介をしないといけない。通り一遍の自己紹介に加えて、ドイツ語の著書もあるので「私はこういう本も書いています」と出版社のＵＲＬを貼りつけます。それから「私のホームページはこうなっています」とドイツ語のホームページも貼りつけます。これでまあ、まじめに研究している者らしいと思ってもらえるわけです、おそらく。そして本題として、何を捜しているか、何が知りたいかを箇条書きにして協力をお願いする。そこにコリーノの伝記の当該箇所を添付ファイルにして一緒に送る。つまりここまでは分かっていてここから先を調べたいという、これまでの状況を書くわけです。そうすると、三つか四つの施設から色々な返信がくる。うちよりはあそこに行きなさいというのもある。「担当者に転送しました」と返信がきてからしばらくして部下の部下から返信がくるのもある。実際に有効なのは二箇所ぐらいなのですが。

アーカイブの職員もふつうは三重、四重に仕事をかかえていて、日本からの飛び込みの調査につきあっている閑はほとんどないと考えてよいと思います。それでもアンガジールト（engagiert）な、つまり一緒にのめり込んでくれる職員がときどきいます。これはおととしの、チューリヒから来た返事です。市立文書館の、巡り巡って三人目ぐらいの、カロリーネ・Ｓという人がくれた

返事です。「今私の手元にあるのはこれこれです」と、それまでの新聞記事などをＰＤＦにしてダーッとくっ付けて寄越しました。そういうわけでこの人は、何が最新情報かというのが分かっていますので、先ほどのペンション・フォルトゥーナの論文抜刷りを送付して、「よければ私が新チューリヒ新聞に記事を書きたいけれども、誰か編集部の人を紹介してくれないか」と言ったら、Ｓさんはすぐ紹介してくれました。ただもっか私が新聞記事を書いている暇がなくて、まだ出せませんが、四月から暇になるので書けると思います。

忘れてならないのはお土産です。伝統柄の手ぬぐいとか絹製の風呂敷とか、あるいは着物の端切れで作ったポーチとか。何でもよいわけではなくて、やはり江戸の柄を再現したものなどきちんと複製したもの、ないし本物です。海外学術調査に出かけるときにはサンタクロースのようにスーツケースにたくさん詰めこみます。これが「開けゴマ」の呪文のように効力を発揮することもあります[3]。

偶然が運命になる

では、なぜこのようなことをやって暮らすようになったかというと、成り行きです。妙な成り

行きで、その辺を少しお話しします。

ありがたいことに、私は理工学部ですが一九九四年から二年間続けて、在外研修に行けました。一年目はなんとなくのんびりしていたのですが、二年目になると慣れてきます。東京外国語大学の谷川道子先生という人が、ウィーン大学のヤパノロギー、日本学の先生として行っていたのですが、それが元気な人で、一年目の最後の二月ごろに、勉強もしないでスキーに行こうと言うのです。ヤパノロギーの学生たち四～五人と一緒に、私と当時の家内と、わいわいと、ザルツカンマーグートとか、ゴーサウとか、あの辺のスキー宿に行って、三泊四日ぐらいで滑っていたのですが、その時一緒に滑っていた学生が、「ムージルの姪を知っている人を知っている」と言うのです。

ムージルの姪だともう亡くなっているはずなのですが、どれどれということで、その知っているという人の所に一緒に会いに行きました。やはり、英語かドイツ語か何かの先生だったのですが、直接聞いたら、名字がメアヴァルト（Merwart）だと、それだけなのです。それだけで充分です。家に帰ってウィーンの電話帳を見ると、メアヴァルトというのは一軒か二軒ぐらいしかありません。電話をしました。

実際はムージルの姪ではなくて、ムージルの父親のアルフレートの弟にリヒャルト・ムージル

という人がいますが、その孫のエルネスティーネ・メアヴァルトさんです。一九一〇年に生まれて一九九八年に亡くなっています。[4] 私が会ったのが一九九五年ですから、お会いして三年後ぐらいにもう亡くなってしまいました。ここにたとえばムージルのおじいさんの婚約、結婚申請書があります。軍医だったので、軍に、結婚していいでしょうかとか、委託金をこれだけ出しますとか、提出した書類です。それどころか、まさに一網打尽という感じでムージル家に関連する写真やドキュメントがごっそりあったのです。それまでその存在すら知られていなかったドキュメントもたくさんありました。くわしい説明は省略しますが、一族の重要な資料がいわば傍系の目立たない親族のもとに一括して保存されていたというのは、珍しいケースではないようです。

すごいのは、三代前までの先祖、親戚の家系図です。三代前までのというのは、これは言いにくいですが、ナチスのおかげです。一九三八年にオーストリアがドイツに併合されましたが、その際「アーリッシャー・ヘアクンフト」(arischer Herkunft sein)、つまりユダヤ人の血が入っていない、アーリア人の系統だという証明書を、例えばリヒャルト・ムージルとか、ルドルフ・ムージルのように公証人とか弁護士をやったりしている人たちは出さないといけなくなって、みんな、父方、母方、さらにその父方、母方の教会に頼んで、出生証明書や婚姻証明書を取り寄せました。ご存知のようにヨーロッパでは日本のように戸籍で管理されていなくて、重要な記録は教

会にあるわけです。おかげで私のようなムージル研究家は、走り回ることなく一気にドキュメントをゲットできました。さらにこれもナチスのおかげですが、それまで公文書はフラクトゥーアつまり亀の子文字の筆記体で書かれていました。ナチスはタイプライターで公文書を作るようにさせました。そんな訳で、私のような者にも一目で分かる資料が一気にゲットできたわけです。

その後もいろいろな所を歩いて、とにかくいろいろなおばあさんに教えてもらいました。とにかく、よく知っているのはおばあさんなのです。しかも、だいたい私が会って二年か三年たつと亡くなります。ですから少なくとも私が、おばあさんたちから貴重な話を集めたということは言えると思います。

若干具体的に説明しますと、以上のメアヴァルトさんのもとには、ローベルト・ムージル父方の祖母のアロイージア・ムージルと、こちらの祖父のマティーアス・ムージルの肖像写真も残っていましたし、これが、アロイージアの手書きの日記です。このあたりに「6. November」、一一月六日とあります。「アルフレートの嫁が男の子を産んでくれた」、つまりローベルト・ムージルが生まれた、と書いてあります。この祖母の日記は昔の亀の子文字の筆記体ですから、現代のドイツ人でも慣れていないと読めないようなものなのですが、解読手引き表を自分で作って、全部をタイプで打ち直しました。ですから、こういう日記の一部も、先ほどのコリーノの伝記に取

り入れられています。

それからこちらは「DISSERTATIO FACIE HUMANA」、人の顔についてというので、祖父のマティーアス・ムージルの医学博士論文です。これは、ヨゼフィーヌム（Josefinum）というヨーゼフ二世が軍医養成用につくった医学学校がウィーンにありまして、そこにマティーアスが一八三五年に提出した、全部ラテン語で三二頁の医学博士論文です。これも私がオックスフォードの、一冊七万円の羅英辞典を使って、ラテン語からドイツ語に全部訳しました。その後、クラーゲンフルト大学のラテン語の先生が、原文と私のドイツ語をチェックして、直す所は一箇所もないと言われました。その先生ができるかどうかは、私は分かりませんが。そういうこともやりました。

こういうことがあってからですかね、伝記的なこととか、昔のムージル関係の埋もれた資料を探しに行くのが癖になってきました。これはもうご存じの方はご存じですけれども、ムージルが一八歳の時にブリュンの新聞の日曜版に投稿した作品です。作者名が M. Robert となっていて、当時のブリュンの作家たちを見渡しても、内容的にも、まずムージルだろうということです。

これは、もともとヴォイエン・ドゥルリーク博士というチェコの演劇研究家が見つけたのですが、彼はコリーノに「見つけた」とだけ言っておいて、どこに何があるのかはずっと黙っていま

した。私がブリュンに行くというのでコリーノから「ぜひドゥルリークから聞き出してくれ」と頼まれました。ブリュンで彼を捕まえて、なかなか言おうとしないので、「ビールを一杯飲みに行こう」と言うと、「いや、ちょっと今日は用があって」などと言うので、「いーから！」と無理やり座らせて、飲ませたら、紙切れにチェコ語で、チェコの歴史研究の雑誌名と号数だけちょこちょこっとメモしてくれました。これでブラボーです。ブリュンにはマシャラク君という、もう何年もチェコ語とドイツ語の通訳をやってもらっている坊やがいますので、それをドイツ語のタイトルに直してもらいました。ウィーンに戻ると、なにしろもとはハプスブルク帝国ですから、昔のチェコの雑誌であろうと、新聞であろうと、全部ウィーンのナショナル・ビブリオテーク（国立図書館）にきちんと取ってあります。そこに直行すると、すぐにこの記事が出てきました。「In Der Dämmerung」（薄明にて）です。それからもう一つが「Eine Spiritistische Seance」（交霊会）という、少しおどけた作品です。これもムージルの最初期の作品で、先ほどのコリーノの伝記にはもう入っています。これはムージルが一七歳の時の作品で、もちろんドゥルリークが発見したのですが、現物を探し出して中央大学の紀要に内容を紹介したのは私だというわけです。

なにしろ中央大学では、毎年何かを発表しないと基礎研究費をもらえないという圧力がありますので、だいたい中央大学の「ドイツ文化」か「人文研紀要」に発表してきました。あとはたま

にはヨーロッパの学術雑誌にも載っています。

基本的に海外学術調査をしてきたわけで、ひどいときは二〇〇五年なんか四回ヨーロッパに行きましたが、どうやってそのように毎年行けたかというと、たとえば特定課題研究費をもらいました。理工学部なので、大昔は語学の教師が順番で特定課題研究費をもらえました。ところが二〇年ぐらい前になると、何かまずかったらしくて、順番でもらえなくなって、今の他学部もそうかもしれませんが、科学研究費助成事業に申し込んだ人だけ特定課題研究費を申請できるというシステムに変わってきました。

理工学部というのは雰囲気が相当違う所で、例えば昔は毎年三学科ぐらいが一億円予算といって、一億円の機器をどかんと買っていました。それで、教授とか助教授の昇任時になると、人事資料がたいてい百頁単位でどさっと配布されるのです。有審査論文が一箇月に共同研究で五本とかです。そういう世界で、専門学科の先生方の半分ぐらいは科研費をもらっていますかね。そのなかでは語学教師が、まあ表現は微妙になりますが、取り扱いにやや違いが感じられるところでした。何かにつけて、不愉快な思いをしてきたので「おいらだって科研費ぐらい申請できるわい」という感じで、どうせ落ちたら毎年同じ申請書を出せると思って出したらなぜか通ってしまったので、苦労しました。

そういうわけで二〇〇二年に三三〇万円の科研費が出て、それから特定課題研究費ももらいました。これも一人で一〇〇万円ぐらいは使えます。もう一度科研費をもらって、これが四〇〇万円です。それからまとめて学術図書として本を出すというので、また八〇万円の補助をもらいました。ですから、基礎研究費と合わせると大学と日本学術振興会からこれまで二〇〇〇万円ぐらいの研究費を使わせてもらったかと思います。

ただしもうかったわけではなく、例えば科研費をもらって現地調査に行くと、持ち出がどうしても出ます。つまり、研究したいのでしょうと。一〇〇万円かかるのであれば、八〇万円ぐらいは出してあげますよという感じが研究費ですね。

そんなこんなで、二〇〇五年にローベルト・ムージル・メダルというものを頂きました。日本人では三人目です。一人目が東京大学名誉教授の浜川祥枝（さかえ）先生です。二人目が一橋大学名誉教授の加藤二郎先生です。三人目が私で、まだ名誉教授になっていませんが、まあ順調にいくと、四月になれるかなというところです。

それでこれが、新井先生もお持ちの拙著「GENIUS LOCI」です。日本学術振興会から八〇万円の補助を頂きました。結局ドイツのヴィルヘルム・フィンク（Wilhelm Fink）社から出たのですが、最初に申し込むときに学術振興会の募集要項を見ると、希望する出版社を書く欄に日本の

出版社しか書けないようになっていました。ドイツの出版社から出したいと言うと、研究支援室が、「これは難しいから直接学術振興会と話してください」と言うので、学術振興会に電話をかけますと、やはりお役人ですから、「募集枠のないところに応募すると言われましても……」とか言うわけです。それで、図々しいですが、「あの、私はドイツ人と勝負しているのですが」と言ったら、「ちょ、ちょっと待ってください」と言って、一週間後に電話が来て、「では、いいです。応募してください」ということになって、やっと出るようにできました。学術振興会の出版助成で外国から出た最初の本になります。その点だけは、内容はともかく、自慢できると思います。

ウィーンのラズモフスキー街

以上が枕でして新井先生に、何を話したらいいか分からないと言ったら、ウィーンを中心にやってもらいたいというようなメールが来たので、今日はウィーンの話をします。

ムージルは一九二三年から三八年まで、このウィーン三区のラズモフスキー街二〇番の、二階の八号室に住んでいたと公式にはなっていますが、実際にはここの所です。日本式に言うと四階

なのですが、もちろんヨーロッパですから、日本の一階は地上階と呼ばれて、その上から一、二、三階と数えます。地上階の上の階は数えないのです。メツァニーン（Mezzanin）といって、いわゆる中二階ということです。つまり税金逃れのために、役所には四階建てという届けになっています。

このラズモフスキー街の家もいろいろと面白いのですが、元々これが建つ前は、司教の学生寮（Erzbischöfliche Alumnenhaus）がありました。六棟の二階建ての家が元々あったのだそうですが、それを撤去して、ここに建ちました。ウィーンの土地勘のある方は一目でお分かりになるかと思いますが、ここが市立公園で、ここにヨハン・シュトラウス像があります。右のほうに流れているのがドナウ運河です。地下鉄のローフスガッセという駅がここにあります。ここからラズモフスキー街が、こう東に延びています。ここにラズモフスキーという記念碑のマークがありますが、ここはラズモフスキー宮殿跡（Palais Rasumofsky）です。ロシア大使のラズモフスキー伯爵、のち侯爵ですが、一八〇六年に建てた宮殿があって、道路を挟んだこの向かいの場所にある、先ほどの黄色い建物が、ムージルが住んでいた集合住宅です。

空中写真で見るとこうなります。（……）ドナウ運河を渡ってプラーターに続くところにロートゥンデン橋があります、これはラズモフスキーが一七七九年ごろに作らせた橋です。このラズ

ラズモフスキー宮殿（跡地）と集合住宅。Google Earth より。

モフスキー街という名称も、ラズモフスキーが来る前は、「Rauchfangkehrergasse」、つまり煙突掃除人横丁という名前だったそうです。

さてムージルの入っていた集合住宅です。これはまず一八〇三年から〇七年にかけて、ラズモフスキー伯爵の厩舎（きゅうしゃ）として、まず日本で言う二階部分まで作られました。ですから、この出入り口の大きな所は、馬が出入りするものです。ムージルが住んでいた東側の棟、こちらの棟は入り口が小さいですから、穀物や、馬具などの付属品の保管に使われたのではないかといわれています。さきほど見たように一八〇六年にラズモフスキー宮殿の本館が建てられていましたから、ほぼ同時進行で建設されています。ベートーヴェンはラズモフスキー伯爵の注文に応じて有名な弦楽四重奏曲「ラズモフスキー」三曲を一八〇六年に出版していま

すし、交響曲「運命」と「田園」はラズモフスキー伯爵に献呈されています。手元の資料によると「運命」は一八〇八年にラズモフスキー宮殿で初演された、とありますので、おそらくベートーヴェンを送り迎えした馬車の馬たちは、この厩舎に収容されていたでしょう。

それだけではありません。一八一五年のウィーン会議のときには、ロシア皇帝アレキサンダー一世がこのラズモフスキー宮殿に滞在して、たびたび催し物が行われました。映画『會議は踊る』の舞台のいくつかは、ここを想定してのことだったと考えられます。そうすると、あのリリアン・ハーヴェイ演ずるクリステルが空しくアレキサンダーを待った小宮殿（Schlösschen）、つまり妾宅も、これはフィクションの世界ですが、やはり三区のこのあたり、厩舎の裏からドナウ河にかけてのあたりにあったのかな、と思います。

ひところは華やかだったラズモフスキー宮殿も、一八三六年にラズモフスキー侯爵が亡くなると、跡継ぎがなかったこともあり、残された夫人は宮殿をリヒテンシュタイン公に莫大な金額で売却します。しかも年金もつけてもらって。リヒテンシュタイン公は自分の宮殿を修理するあいだはここに住みますが、やがてオーストリア国家に貸し出して、その後宮殿は国有化されます。今は国土地理院と商業高校が入っています。

お向かいの厩舎の方も、建築士のペーター・ゲルルという人が転用して、賃貸用の集合住宅に

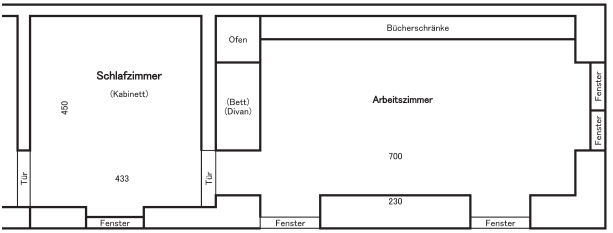
します。つまり一八四八年から五四年にかけて、もともと二階建てだった厩舎の上に三階から五階部分が上乗せされました。そういうわけなので、ムージルの住居はそれほど高級な住宅ではなかったと思われます。

ムージルの住居

それでは、ムージルの住んでいる所を見たいのですが、実際には、先ほど見た、日本式に言うと四階にいたのですが、現在は四階にはエルフリーデ・Rさんという、私と同い年のおばあさんが一人で住んでいます。私とは文通しかしません。本人には絶対に会えません。

このドアに、8号室とありますが、これが実際にムージルのいた部屋です。ところが、この一階下、日本式で言う三階に、グラーツ作家協会が入っていまして、そのグラーツ作家協会はムージルの記念の場所というので、どなたでもおいでくださいと入れてくれます。実際には一階ずれているわけですが、間取りなどは同じだから、というわけです。

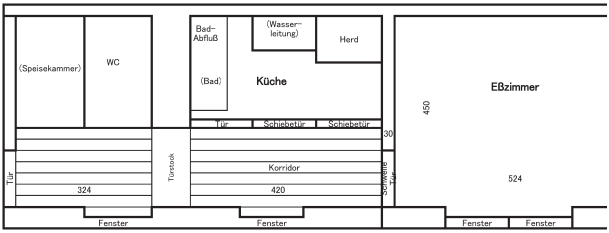
これが、そのグラーツ作家協会の入り口を入ったところで、見たら分かるのですが、ここが、おおよそ幅が六〇センチメートルぐらいの枠です。つまり、昔はドアが一つ奥にあって、手前の



ほうは後からつぎ足されたものだということが、後で分かりました。

それから、ここがキュッヒェ、調理台のような、台所のようなものです。そこで説明を聞くと、ムージル夫妻はお風呂を持っていなくて、ここにゴム製のたらいのようなものを置いて、お湯をためて、そこで座って入浴したと説明されたのですが、ところが、この上の四階のエルフリーデ・Rさんの所には風呂があるのですね。それが、お手元のプリントの、変に横に長いこれです。この平面図は私がRさんの情報にもとづいてエクセルで作成したものです。このウナギの寝床のような所が、ムージルが住んでいた住居です。左から、Speisekammer、物置です。それで、WC、トイレなのですが、左から五センチメートルぐらいの所にTürstockとありますが、ここが元の玄関の枠だったのです。ものすごく頑丈な枠があります。廊下を入って、左側にBad-Anschluss、風呂の接続と書いてあります。

一度、Rさんが、四階の本当のムージルの所を博物館にしたいから三階に移ってくれないかと言われて、移動しようと思ったのだけれども、



そうしたら、このお風呂がどうしても三階の枠に収まりきれないので諦めたという話をしています。なぜかというと、少なくともオーストリア辺りの建物は、地上階から上まで、中の広さが変わっています。つまり、外側は同じですから、地上階の壁は七五センチメートルの厚さで、頑丈なのです。ところが、三階、四階ぐらいになると、厚さが五〇センチメートルぐらいに変わってきます。上階の重量がないので薄くてもいいわけです。そういうふうにして、上の階にいると部屋が広くなるという構造のようです。ここにある寸法、三二四センチメートルとか、四二〇センチメートルとかは、住民のRさんが全部自分で測ってくれたのです。ですから、それ以前に、コリーノの伝記には、グラーツ作家協会が出した数字が載っていたのですが、コリーノがこれを見て数字をかなり入れ替えたわけです。

そういうわけでムージルは、最終段階ではお風呂に入れました。最初の手紙、入居したてのころには妻のマルタが娘に、普段は顔しか洗えないと書いていました。ですから、前後してすみませんが、できたばかり

の集合住宅は、使用人用といいますか、Diener、いわゆる奉公人とか、そういう人たちの宿舎だったようで、水道は共同水道、トイレもおそらく共同だったでしょう。ウィーンでも、今でもたまにありますよね。下宿とか安いペンションで鍵を一つ持たされて、トイレはどこか共同で使うという、もとはそういうパターンの所だったのが、あとでいくらか改造されて、廊下側にドアを張り出して、トイレと風呂も付けられたというような所だったようです。

左から三つ目が食堂です。四つ目が寝室です。ムージルは作家ですから、たまに雑誌の編集者や、インタビューに来る人がいます。これが右端の仕事部屋に行くまでに、もういろいろな部屋をずるずると通っていかなければならないというので、寝室とかにはカーテンを垂らして、あまり見られないようにして、奥まで導いていったというわけです。

この右端が、ムージルの仕事部屋です。画面が、このグラーツ作家協会の右端の部屋なのですが、もちろん絨緞もないし、ランプとか、家具や調度はだいぶなくなっています。カッヘルオーフェン、つまりストーブはあります。あとは、マルタ・ムージルの自画像の複製が掛かっています。

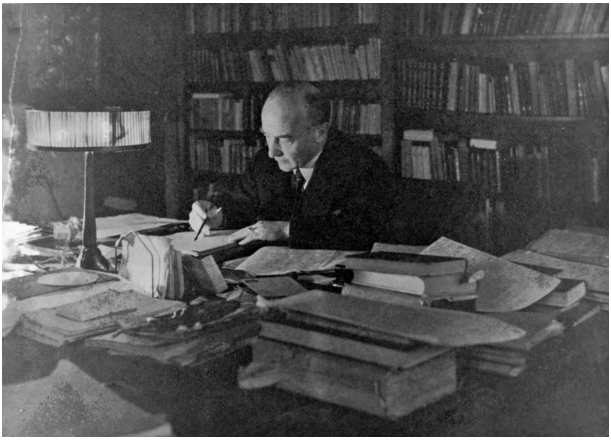
私が最初に在外研究に行ったときの受入教授はウィーン大学のピヒル博士で、グリルパルツァーがご専門でしたが、のちにラズモフスキー街の論文抜刷りを送付したら、「自分は数え切れな

いぐらいムージルの旧居のそばを通ったけれども、中に入ったことは一度もなかった」という返事がきました。現地の人というのはそんなものです。はるばる日本から行くから、受入れる側もテンションが上がるというか、密度が濃くなる。説明する方も熱が入るわけです。そしてそれまでの通り一遍の説明を訂正しなければならないような成果を、海外学術調査の結果として当該施設に送付するのは、やはりひとつの貢献だろうと思います。

ザルム宮殿

これがそのラズモフスキー街で仕事をしているムージルの写真です。一九三六年、亡命の二年前です。正装して、というかきちんと背広を着てネクタイを締めて作品を書いていたそうです。ムージルの仕事部屋の東側の窓からは、隣のザルム宮殿の温室が見えます。奥の樹々も見えます。

このザルム宮殿というのも、忘れてならない建物です。ムージルは一九四二年四月一五日に亡くなったわけですが、その日に書いていた原稿が、『夏の日の息吹』という章の真ん中あたりか、終わりのあたりです。そこで、小説の主人公のウルリヒと、双子の妹のアガーテが、庭の木の下で寝そべりながら愛について語り合うという名場面があり、そこでは、花びらの葬列がひらひら



© Robert Musil Literaturhaus, Klagenfurt

と宙を渡っていくという場面を書いていて亡くなったわけですが、コリーノはこのザルム宮殿の庭を想定しているのだろう言っていて、私も別に文句はありません。

さらにコリーノは第一巻から出てくるウルリヒの住んでいる家が、ウィーンの郊外にかかったあたりの、Schlösschen、小さなお城ですが、ザルム宮殿がモデルだろうと書いています。でもザルム宮殿は小さなお城というよりは、もっと大きいです。

小説『特性のない男』には、ウルリヒの小宮殿は後からいろいろと付け足されたりして、二重撮り、三重撮りの写真のようにぼやけた印象になっているというふうに書いてあって、コリーノもそういう印象だなどと書いているのですが、これも

ザルム宮殿の設計図を見ますと、一度にほぼすべて作られています。ただし後からの工事で、バルコニーとそれを支える部分が三年後ぐらいに作られています。このバルコニー部分を後から付けるのは、本館のほうが石造りで重いので、多少沈みます。本館と同時にバルコニーを作ると、本館の沈降とずれるので、接続部分が折れてしまう、段差ができるということになるのではないかと思います。ご存じの方がいたら、教えていただきたいです。

現在このザルム宮殿に住んでいるのは、ハインツ・マルシャレク（Dipl. Ing.）というリンツ出身の建築家ですが、文学部に行こうかと思ったけれども、金にならないので建築家になったと言っていました。ウィーン西駅の地下鉄部分の設計をした人です。二度ほどザルム宮殿に足を踏みいれることができました。パーティーにも呼ばれましたが、ワインが飲み放題で、廊下とか階段の手すりにピーナッツとレーズンの入ったグラスがおつまみとしてあちこちに置いてあるのです。何十人かのお客がそぞろ歩いていました。もう、中もきらびやかなもので、本当にパレスでした。

これも知っている方にお聞きしたいのですが、マントヴァのゴンザーガの館だと、馬で三階まで上がれるようなトレッペがあります。階段ではなくて、斜面で上がります。昔はエレベーターがないので、馬で三階ぐらいまで上がって、あとはぺちっと尻をたたけば、馬は自分で厩舎に帰っていくという馬用の階段があったと思います。設計図をみると、そういう螺旋階段というか、

螺旋斜面のようなものがあるのですが、どうなんでしょう。ご存じの方がいたら、教えていただきたいです。

それから一九三〇年代に、このザルム宮殿には、イージドーア・クライスベルクというレンベルク出身の、ガリツィエンに油田を持っているというユダヤ人のお金持ちが入っていまして、その夫人がベルタ・クライスベルクといって、歌手だったのですが、このベルタ夫人がヘルマン・ブロッホを気に入ってしまって、ブロッホがザルム宮殿によく出入りしていました。ムージルのほうは入れなかったのだと思いますがね。ブロッホはムージルより六歳年下で、カフェ・ヘレンホーフのムージルを中心とする集まりの常連でした。たとえばムージルの戯曲『ヴィンツェンツ』には「青年」が出てきますが、ブロッホがモデルと言われています。中央大学ドイツ学会の先輩の入野田真右（まさあき）さん、彼は仙台一高の先輩でもありますが、ブロッホ研究家でして、あるとき私に向かって、「ブロッホのほうがムージルよりはるかにもてたのだからね」とか言って威張っていました。

このブロッホからムージルは多少ザルム宮殿について聞き出せたのかもしれません。この建物についてはいろいろな話があって、一九三八年の併合後、ナチスが入りました。いい建物は接収しますから。ナチスが入って、高官の愛人も住んでいたとかいう話もあります。第二次大戦終結

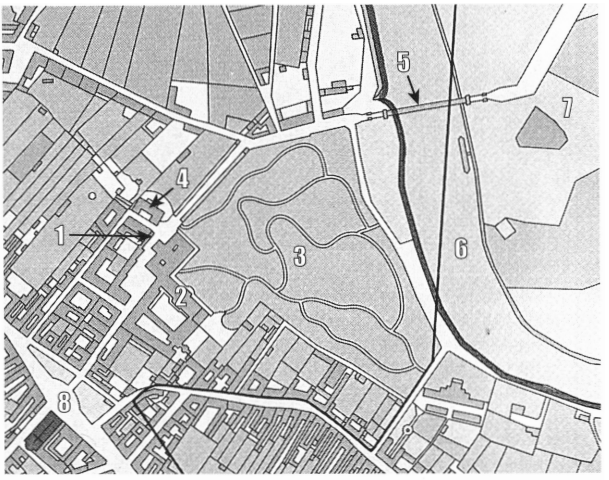
後は、今度はロシアの赤軍が来たわけです。ロシア人が来て明け渡せと言いました。その時はドイツ人の家族が住んでいたそうです。

これは聞いた話です。先ほどの四階に住んでいるエルフリーデ・Rのお母さんが、老齢で病院に入院していて、彼女の話を私が伝え聞いてから一～二年で亡くなったのですが、この病院のお母さんの話として、ドイツ人が住んでいたところ、そのロシア人が明け渡せと言って、そのドイツ人が断ったと。そうしたら、その夫婦と息子を庭で射殺したと。娘一人だけ逃げのびたというのですが、そのお母さんも、おそらくうわさを聞いたのだろうと思います。

その後今度はイギリスのプレッセ、特派員ですかね、が入りました。いろいろと歴史があるようです。

だんだん私も疲れてきました。ですが、もう一気にやります、あと五分ぐらいで終わります。

お手元のこの地図をご覧ください。もうほとんど説明し終わったものですが、白抜きの1番が、ムージルの住んでいたラズモフスキー街二〇番の場所です。本当に端っこです。2番がラズモフスキー宮殿です。3番がラズモフスキー宮殿の庭ですが、今はもういろいろな建物が建ってしまっています。それから4番目がザルム宮殿です。右上の5番が、ロートゥンデン橋です。これを渡って行きますと、7番になっていますが、プラーターです。



Der Stadtplan (Teil) vom 1829 (1) das Gebäude der späteren Wohnung Musils (2) das Palais Rasumofsky (3) der Park des Palais Rasumofsky (4) das Erzbischöfliche Alumnenhaus (später das Palais Salm) (5) die Rotundenbrücke (6) der Donaukanal (7) der Prater (8) St. Rochus. aus: Historischer Atlas von Wien. 2. Lieferung. 4.1.2. Wien mit Vorstätten 1829 und Vororten 1818–1821. Wiener Stadt- und Landesarchiv Wien. Ludwig Boltzmann Institut für Stadtgeschichtsforschung, Linz-Wien. Jugend und Volk Verlagsgesellschaft m.b.H., Wien — München

なぜムージルがこのウナギの寝床で、水道やトイレも不便なのに、結構長く、一〇年以上住んでいたのかということで、推測ですが、このプラーターに歩いて一〇分ほどで行けるからだと思います。そこでテニスの国際試合があったりしました。ムージルはスポーツマンで、当時最新のクロールが始まるともうクロールを習い覚えるとか、ボクシングをやるとか、自転車がはやり始めると自転車に乗るとか、なかなかのスポーツマンでした。縄跳びをやると二千回飛ぶとか、血圧が高くて二五〇ぐらい

あるのに、そのようなこともやるというスポーツマンなので、プラーターに行って気分転換ができたと思います。

それから左下の8番にロークスとありますが、教会です。このあたりに映画館があって、ムージルは映画が好きで、チケットは少し高かったのですが、やはり週に一回ぐらい、よく見に行っていたという話もあります。

そろそろ終わりですが、これがウィーンの外れの金属回収業者の倉庫の写真です。ムージルは一九四二年まで、先ほどのラズモフスキー街の家を借りていました。一九三八年に亡命してからは、残った知人が家賃を払い続けていたのですが、ついに一九四二年になったら、ウィーン市がもう接収すると、住んでいない人の住居は空けてもらうというので、中身をこの倉庫に預けました。ドレースデン通り二六番から二八番という所の倉庫に預けたのですが、一九四五年の三月に、爆撃されまして、いろいろな本や手書き草稿などのムージルの遺品が、全部爆撃でやられてしまいました。

その前に知人の一人が気を利かせて、銀の食器だけは救い出しました。今は笑い話ですよね。どうせ救い出すのだったら、手書き草稿の一つかみでも取っておいたら、今でしたらかなりの資料になるでしょう。銀の食器が確保された、というのがムージルにとっても、支援者にとっても、

何ともかわいそうですね。とはいえ仮に一九四五年の爆撃の後に、草稿とか紙が残っていたとしたら、燃料として貴重なので、みんな持っていって、ストーブにくべて暖を取ったに違いありません。まず、残っているわけはないという話です。

ここの廃品回収業者さんに、「今までムージル研究家がここまで来ましたか」と聞いたら、「来たのはあなたが初めてです」と言われました。こんな風に、ヨーロッパの研究者は意外になまけものです。はるばる日本から調べにゆく余地はまだまだありそうに思います。

というわけで、語り尽くせませんが、あちこち歩き回ってコバリドという、スロヴェニアの山の上の、第一次世界大戦記念館まで行ったり、あとは、インスブルックの近くのマルティンス・ヴァント（Martins Wand）という、岩壁に穴が開いていて、マクシミリアン皇帝が二日間下りられなかったという伝説の穴を訪ねて行くと、途中でうそを教えられて、変な所に行ってしまって、戻るときにイン川を渡るのですが、ごうごうと流れる河の上に、幅三〇センチメートルぐらいの歩行者用の橋があって、もう恐ろしいから歌を歌いながらやっと渡りました。

そういう訳で、最後にYoutubeにある映画『サウンド・オブ・ミュージック』の「すべての山に登れ」を流します。これはジュリー・アンドリュース演じる、主人公のマリアがトラップ大佐を好きになってしまって、困惑して修道院に逃げ込んで、閉じこもってしまうわけですが、そ

こで修道院長が励ます歌です。

すべての山に登れ、高きを、低きを、訪ねよ
いかなる脇道もたどってみよ
どんな流れも渡れ、すべての虹を追え
おまえの夢をみつけるまで……

皆さんもよろしかったら、ぜひ、日本に生まれたという特権を生かして、海外学術調査に出かけられてはいかがでしょうか。
ご静聴ありがとうございました。

（二〇一八年二月二日　中央大学駿河台記念館　人文科学研究所談話会にて収録）

註

（1）ちなみに二位はカフカの『訴訟』です。昔は『審判』というタイトルで翻訳も出ましたし、アンソニ

ー・パーキンス主演の映画も流行りました。三位がトーマス・マンの『魔の山』です。三位のトーマス・マンだけノーベル文学賞をもらいました。長生きしています。ムージルとカフカは不運のうちに亡くなりました。

（2）　参考までに。理工学部では各先生方の国際学会論文抜刷りの購入について連絡者会議（学科主任会議）に諮られます。一〇〇部単位が基本です。グローバル化に関しては理工学部が先行しているように思います。

（3）　もう三〇年ほど昔、ウィーンの国立図書館の偉い人と会った際に、日本の手ぬぐいを二本ほど手渡したら、ガラッと態度が変わり、「何が見たい？　何が欲しいんだ？　何でも言ってくれ」と言われて、むしろこちらが驚いたことがあります。

（4）　メアヴァルトさんだけでなく、亡くなる数年前に私が会って貴重な情報を得ることができた老婦人は多数います。ヴィシコフのヴェーラ・ムシロヴァさん（一九一七～二〇〇八年）、彼女はムージルが大叔父のアーロイス・ムージルに充てた手紙（重要）をもっていました。ボルツァーノのディ・アンジェリさん（一九一四～）は、一九一六年にムージルが住んでいた「ヴィラ・イシドラ」の持主で住民でした。端的に言うと「お婆さんは何でも知っている」。ぎりぎりのところで彼女たちの話を聞けたのは幸運でした。

あとがき

本書は二〇一八年二月、定年退職の一箇月前に催された人文研談話会で話した内容を、若干加筆修正したものである。一二月に最終講義をしたけれども、それとは違ってドイツ語の通じる、いわば同業者を前にしてアットホームな感じで話せたので、談話会に出てよかったと思っている。時間もたっぷりあり、こうしてまとめてみると、自分の仕事を振り返るよい機会だったと思う。オーガナイザーの人文科学研究所「ハプスブルクとドナウ文化」チーム責任者、新井裕先生に感謝申し上げる。

会場ではパワーポイントで画像を呈示しながら話したので、少々分かりにくいかも知れない。画像は早坂のホームページにすべて貼りつけてあるので、興味のある方はそこでご覧下さい。

海外学術調査は私の仕事のすべてではないにしても、かなりの部分を占めている。これで文学研究の王道を歩んだつもりはさらさらない。野球でいえばバント要員ぐらいだ。ただしメジャーリーグの。ちょい役ながらここで何人かのランナーを確実に進めることはできたと思っている。

研究助成課、研究支援室、中大出版などこれまでの活動をサポートしてくださった教職員のみなさまに感謝申し上げる。またテープ起こしなど本書の実現に尽力してくれた人文研の百瀬友江

氏にも御礼申し上げる。

早坂　七緒

早坂七緒　（はやさか　ななお）

1947年宮城県に生まれる．東京大学人文科学研究所独語独文学科博士課程中途退学．岡山大学教養部講師，山形大学教養部講師，助教授を経て，1985年中央大学理工学部に着任．現在名誉教授．オーストリア政府給付奨学生（1982-1983）．ウィーン大学客員研究員（1994-96，2010）．

著書　Robert Musil und der genius loci. Wilhelm Fink Verlag, München（単著，2011年）ほか欧文共著３冊．『陽気な黙示録 オーストリア文化研究』中央大学人文科学研究所 研究叢書11．（共著 1994），『思惟する感覚 ムージル論集』鳥影社．（共著 1995）ほか和文共編著２冊．

論文　Besuch der Kaserne Generál Zahálky, (. . .) Internationale Robert-Musil-Gesellschaft.（2003）など欧文論文20件．「西洋の没落」とムージル『ドイツ文学における《ユートピア的なもの》の位相』．柴田翔（研究代表者）．東京大学文学部．（1989）など和文論文多数．

翻訳　『ムージル・エッセンス』（エッセイ選集）著者：ローベルト・ムージル．中央大学出版部（共訳 2003）．『アルザスの小さな鐘』著者：マリー＝ルイーズ・ロート＝ツィンマーマン．法政大学出版局．（単独訳 2004）．『ムージル 伝記３』著者：カール・コリーノ．法政大学出版局（共訳 2015）ほか５冊．

学術受賞　ローベルト・ムージル・メダル（2005）．第９回日本オーストリア学会賞（2013）．中央大学学術研究奨励賞（2014）．

海外学術調査のスリルと愉しみ　　人文研ブックレット　35

2018年 8月20日　第１刷発行

非　売　品

著　者　早　坂　七　緒

〒 192-0393　東京都八王子市東中野742-1
発行所　中央大学人文科学研究所
所　長　秋　山　　嘉
☎042-674-3270